

## S III-1 分子レベルからみた ALI と ARDS の概念の整理

### 同一症候群：ALI/ARDS の提案

自治医科大学 集中治療部

窪田 達也

Medline の検索で 1998 年度 1 年間で、論文の題名中に ARDS の用語が用いられている論文数は 166 題あり、ALI の用語を用いている論文数は 123 題であった。いずれの用語が用いられているにせよ急性肺障害を扱っており、重症度あるいは発症の時期等の相異によって区別されているものと推測される。ALI (Acute lung injury) は急性肺傷害の字句が示す如く、肺傷害の病因論的病態を示す用語であり、一方、ARDS は Ashbaugh らにより提唱された、元来肺に原疾患を持たず外傷、大量輸血、全身感染症等が原因となって発症する急性重症呼吸不全の一群である。そのため両者を同一に論ずることに異論がない訳でもないが、分子レベルでの解析が進み、発症病態が明かになるにつれ、敗血症やその他の侵襲が人では肺が標的臓器となり、肺に強度な炎症反応が起こり、種々のメディエーターが動員され、その結果、肺毛細血管内皮の広範な損傷、血管透過性の亢進、線維化へと進む一連の疾患として理解

されつつある。研究者の中には一種の alveolitis として捉えているものもある。JM.Luce は ALI と ARDS との異同について詳細な検討を行い、ARDS の病態は ALI の極期であり、(Very) early stage of ARDS とはまさしく ALI そのものであると説明している。

1994 年のアメリカ・欧州合意カンファランスは ALI と ARDS の区別を肺酸素化能の障害の程度で基準化している。

ALI/ARDS を同一症候群として一本化することは、肺傷害の過程の解析、病態を明かにする上で有用であると考えられるが、臨床的に他の呼吸不全との鑑別が困難になることは否定し得ない。特に、きわめて初期の軽度な ARDS (ALI) の場合に他の疾患との鑑別に問題が生じるかもしれない。

今後、学会の枠にとらわれず、より学際的立場から、ALI/ARDS の clinical entity に関する統一見解を出す必要があると考えている。